

ロストジェネレーションとシャッター街の共栄可能性

— 「素人の乱」 へのフィールドワークを通して —

慶應義塾大学環境情報 4 年

石嶺絵理子

t05059ei@sfc.keio.ac.jp

1. 序論

1-1. 研究背景

1-2. 先行研究

1-3. 研究手法

本論

第 I 部：若者／商店街を取り巻く状況

1-1. 経済的な変化

1-2. ロスト・ジェネレーション

1-3. シャッター通り化する商店街

第 II 部：「素人の乱」

2-1. 「素人の乱」の中心人物

2-2. 「素人の乱」の人々の日常

2-1-1. 時間感覚

2-1-2. 金銭感覚

2-1-3. 恋愛感覚

2-1-4. 場所感覚

2-3. 素人の乱の個人活動の影響

第 III 部：高円寺北中通り商店街

3-1. 各商店街の様子

3-1-1. 純情通り商店街

3-1-2. 北中通り商店街

3-1-3. その他の商店街

3-1-4. まとめ

3-2. 北中通り商店街の歴史

3-2-1. 商店街の高齢化

3-2-2. 商店街の店舗数の減少

3-2-2. 商店街の現状と問題点

第IV部：「素人の乱」と商店街

4-1. 「素人の乱」が商店街に出店するまでの経緯

4-2. Sさんについて

4-3. 2003年以降から「素人の乱」が北中通り商店街に至るまで

4-4. 「素人の乱」1号館の誕生から現在まで

4-5. 「素人の乱」が担った活性化

4-6. まとめ

5. 結論

(参考文献)

1. 序論

1-1. 研究背景

高円寺に『素人の乱』の看板を掲げた店が軒を並べている。個人経営の店ながら、“リサイクルショップ（5号館）”“古着屋シランプリ（10号館）”“呑み屋セピア（9号館）”など、次々と店舗を拡大しており、その総数は14号館までに至る。店主のほとんどが、30代、いわゆる「ロスト・ジェネレーション」と呼ばれている世代の男性たちである。

素人の乱の人々は、それぞれに店舗を運営しながらインターネットや映画上映会、展示会などイベントを仕掛けており、その最大規模のものがデモ活動である。“街の景観をマヌケに変える”という目的のもとに、大学キャンパスや新宿、高円寺などでデモ活動を行っており、活動に興味を抱いた人々やマスコミが「素人の乱」の店舗に集まる、といった現象が起こっている。

日々の店舗運営とデモ活動が「素人の乱」当事者たちの中で、いかに結びついているのか。また、なぜ貧乏人を自称する素人の乱の人々が店を開き続ける事が出来ているのだろうか。高円寺という土地との結びつきはどのようなものなのか。

本課題では、“ロスト・ジェネレーション”が生まれた経済的な背景を踏まえつつ、世間一般で捉えられているような不況のしわ寄せを受けている世代という一面だけでない“ロスト・ジェネレーション”のあり方を探っていくことが目的である。

1-2. 先行研究

これまで“ロスト・ジェネレーション”と“シャッター街”は別個の問題として扱われてきた。ロスト・ジェネレーションを扱ったものについては、雨宮処凛『生きさせろ！ 難

民化する若者たち』や小林美希『ルポ“正社員”の若者たち—就職氷河期世代を追う』、また朝日新聞のロスト・ジェネレーションについての記事特集がある。これらはインタビューによるルポルタージュの形式を取ることが多く、ロスト・ジェネレーション世代の“個人”が、どのように生きているのかということとは分かっても、地域や他の世代との関係性まで含んだ全体像を描いたものはない。そのため、インタビューで取り上げた人それぞれ、という結論になってしまい、応用参照することが出来ない。

一方、シャッター化という問題を抱えた商店街の方は、従来からその地域に住んでいる人を中心とした“まちづくり”の取り組みに関する研究が主なものである。しかもその担い手は、一番若い人でも40代中盤ほどだ。

ロスト・ジェネレーションとシャッター街が結びついた事例に、富山市の中央通り商店街で「ミニ・チャレンジ・ショップ¹」という取り組みがある。「衰退する一方であった商店街の活性化のために（中略）空き店舗内を二坪程度に区画割りし、素人の若い起業家に低家賃で貸し出すというアイデア」である。この取り組みは平成9年より行われており、二坪の区画を最初の3ヶ月は無料で、その後は月額1万円で貸し出しており、平成15年時点で65名の応募中45名が独立、29名が現在も営業中であるという。²ロスト・ジェネレーションにも商店街に取っても画期的な取り組みであるが、残念ながらその実生活に関する仔細な研究や、問題点への言及などは行われていない。またこの取り組みで出店している若い店主同士の関係は必ずしも密なものではなく、また商店街との関係も、チャレンジ事業の運営と利用者が分かれているという点で完全に生活に密着しているとは言えない。富山市と高円寺では、賃貸の平均額も異なる。

このような意味で、店主同士が「素人の乱」という看板の下でまとまり、また独自に仕掛けるイベントによって、商店街に足を運ぶ人を増やしている、という点で今後の両者の活性化におけるモデルケースになりうると言える。

1-3. 研究方法

研究方法としては、定期的な参与観察とインタビュー調査を併用したフィールドワークを採用する。

著者は2008年夏頃より、「素人の乱」のメンバーが主宰するイベント、主に自作映画の

¹ 中沢孝夫（2001）

中小企業都市連絡協議会が募集した「地域産業政策大賞」の論文に基づいたもの。「事業の目的は『人材育成と定着化』である。単なる制度的な支援だけでなく、周辺商店の経営者のボランティアによる経営指導やアドバイスなどが実施された。さらに、一年という期間終了後は、市の新規起業支援制度を利用して、商店街内の空き店舗への積極的な誘致が行われた。（中略）輸入衣料・雑貨、キャラクター商品、クレープ、ネイルアートなどで、確実にまちには新しいタイプの客がもどってきているという」

² 「ミニチャレンジショップの取り組み」

(<http://www.pref.mie.jp/machis/hp/details/index.asp?cd=2003010022&ctr=inst&act=131&SubCtg=>)

上映会及びトークショー・作品展示会・政治活動など、へ参加するとともに、高円寺北口の中通り商店街（11号館浦野商店のみ阿佐ヶ谷中杉通りにあり）に展開する「素人の乱」の全14号館のうち実営業中の店舗に足を運んでいる。

素人の乱は、それぞれの店舗を30代の男性の男性が経営しており、高円寺を中心として中古品・古着を回収し、リサイクル品として販売している。店舗運営の傍らで、デモ活動を展開している点が多きな特徴であり常に雑多な人の出入りが行われている。

「素人の乱」が展開する北中通り商店街は、以下の章で詳しく述べるが“跡継ぎ不足”や、それに伴った“商店街の高齢化”、また“物販店の減少”など、抱えている問題は他の商店街と比較しても、際立って特殊なものではない。そのため参考するにあたってある程度の普遍性を帯びていると言えるだろう。

本論

第I部：若者／商店街を取り巻く状況

1-1. 経済的な変化

かつて「日本型経営」は終身雇用、社内研修ということが言われており、これが始まったのは1940年代、広まったのは60年代と想定できる。「新人は三年間は月給をあげている」という言葉に象徴されるように、この「日本型経営」はコストのかかるものであった。それでも、経済成長期で企業に余裕があったことと、終身雇用によって会社への忠誠心を引き出し中堅以上になってからの働きでモトがとれる、という計算によって日本型経営は行われていた。経済成長による人手不足を回避し、労働力を確実に確保するという目的もあった。しかし、低成長になって人手が余るようになり、コスト面ばかりが目立ってくるようになった。

働くことをめぐる状況の転換ポイントとして、それまでの終身雇用制に終了を告げた95年の日経連による「新時代の『日本的経営』」があり、働く人が3つのタイプに分けられている。

- ① 長期蓄積能力活用型
- ② 高度専門能力活用型
- ③ 雇用柔軟型

これら三つを、雨宮氏の言葉を引用して言い直す³と次のようになる。

- ① 企業の中核となる社員。従来の正社員のように長期雇用で昇給、昇進もある。

³ 雨宮処凛（2007年）

- ② 専門的な技能を持つ契約社員。長期雇用ではなく、年俸制や業務給。
- ③ 有期雇用、時給制で昇給はなし。この層が激増し「プレカリアート」と言われている使い捨て労働力。

現在では、三人に一人が③に当たる非正規雇用労働者であると言われている。この提言によって労働法制の規制緩和もすすめられた。中でも労働者派遣法がターゲットとなっており、いわゆる「安くて景気による起用・クビ切りが可能」な労働市場が形成されるようになった。⁴ ここに就職時期当時、採用を控えられた就職氷河期世代、ロスト・ジェネレーションが組み込まれているのである。

1-2. ロスト・ジェネレーション

「1970～80年代に生まれた世代が就職氷河期に当たる。大学に進学した氷河期世代は93年度から社会に出始めた。80年代から一定して70%台後半を保っていた大卒就職率が、93年度の76.2%という高い数値を最後に加速度的に落ち込んでいった。「失われた10年」の終わり頃となる2000年度の55.8%から5年間は「超」がつくほどの就職氷河期となった⁵」

この世代が生まれたのが、バブル経済崩壊後の「失われた10年」であり、現在の25歳～35歳となる。その総数は2000万人いる⁶と言われている。この世代の多くが就職氷河期のために最初のキャリアをフリーターや無職から始めることになり、それはそのあとも“新卒採用”を重視する日本の採用活動にあって不利な状況を招いた。ロストジェネレーション非正社員が4人に1人に上り、失業者も際立って多い。⁷

「ロストジェネレーション」というネーミングは朝日新聞によってつけられた。第一次世界大戦後に青年期を迎えたアメリカの作家達を指す言葉で「失われた世代」と訳されるが、朝日新聞は更に「さまよう世代」という意味も込めている⁸という。

ロストジェネレーションは年齢的に社会の中核となる世代である。それがために不況な社会の中にあっては、派遣社員として酷使されるか、正社員として過労におちいるかという状況になったのである。状況と相まって、離職率が高いのも特徴であり、それらが「自分探し」と結びつけられることもある。

1-3. シャッター通り化する商店街

1980年代、バブル経済を受けて商店街が広がっていた中心市街地に、大型店の進出が

⁴雨宮処凛（2007年）

⁵小林美希（2008）p515

⁶朝日「ロストジェネレーション」取材班（2007）p113

⁷朝日「ロストジェネレーション」取材班（2007）p214

⁸朝日「ロストジェネレーション」取材班（2007）p311

始まった。そのために商店街と大型店が運営で対立するようになり、徐々に小売りが受け上げを落としていくようになる。そこで大規模小売店法が誕生、大型店は中心街を含む既存の商業地への出店が厳しくなり、規模的効率化を追求して郊外に店舗をかまえるようになった。すると同時に客の流れも郊外に向かい、結果、中心街の衰退が始まるのである。⁹ 同時またバブルの崩壊による消費需要自体の減少と相まって、大型店も商店街もともに売り上げが落ちたことも悪く重なった。全国の商店街の空き店舗は急速に増加し、2003年の全国商店街実態調査によると、空き店舗のある商店街の割合は22.4%、1商店街平均で3.9店、率にして8.53%という結果であった¹⁰。「シャッター通り」と呼ばれる商店街が続々と現れ始めた。

そんな中1990年代のはじめ、小売り業の現場から従来の行政や大手商社、シンクタンクが先行して行う「商業調整」に代わって、住んでいる市民が主体となって行う「まちづくり」の必要が商店街で意識されるようになってきた¹¹。

夏祭りや餅つき大会といったイベント運営から、〇〇通りと名称をつけ観光地化を目指す、道に花を植えてイメージをアップするなど、様々な努力が重ねられた。その経緯の途中には中心街に客の流れを誘致するために、郊外化した大型店を再び中心街へ誘致する、という試みも行われた。

それらのいくつかの商店街は上手くいったものの、シャッター化に歯止めが効かない地域も多く、それらは“各個人の努力不足”とみなされた。

しかしながら現在の商店街は、その全盛期であった高度成長期の頃に働き盛りであった人々が高齢化し、また跡継ぎもいないという状況から、動きたくても体力的に厳しい、どうせ自分の代で終わるのだから抵抗しても無駄だ、という雰囲気が漂っている。また商店街の高齢化は、そのままそこで生活する人の高齢化も意味として含んでいる。高齢化した人々は大抵1～2暮らしが多いため大量に食料を必要とせず、また車の運転が出来ないことを因として、中心街が大型店だけになることへの不便不安も抱いている。

第Ⅱ部：「素人の乱」

本章を始めるにあたって、「素人の乱」の主な活動を年表に示す。

2005年5月	<素人の乱1号店>オープン
6月	<素人の乱2号店オープン>

⁹ 小林、毒島、福田 (2004) p1315

¹⁰ 小林、毒島、福田 (2004) p12120

¹¹ 石原、加藤 (2005) p3122

8月	「放置自転車撤去反対！ オレの自転車を返せデモ！！」
9月	<素人の乱5号店オープン>
12月	高円寺駅前にてクリスマス粉碎集会
2006年2月	「週刊素人の乱」発行開始
3月	<素人の乱6号店>、4号店跡地にオープン 「PSE法反対デモ！！」高円寺～中野、新宿アルタ前
4月	<素人の乱7号店オープン>
6月	<素人の乱9号店オープン>
9月	「家賃をタダにしろデモ！！」中野～高円寺
10月	<素人の乱10号店オープン>
2007年3月	素人の乱9号店で、昼に「vegeしょくどう」開店 <素人の乱11号店オープン>
4月	選挙デモ
12月	<素人の乱12号店オープン ¹²⁾ >

2-1. 「素人の乱」の中心人物

「素人の乱」の成立には大きく3人の人物が関わってくる。まずMだが、大学時代から「大学の貧乏くささを守る会」を結成、構内の過剰な美化や学食の賃上げに反対するなどの活動を行っており、卒業後は「貧乏人大反乱集団」や「高円寺ニート組合」という名前で、駅前ゲリラ鍋集会や俺のチャリを返せ！デモを企画・展開している。¹³ Mは2006年頃より地域に根付き自活する若者像のモデルケースとしてメディアへの露出が一気に高まったが、その背景には2006年にPSEマークが付いていない電気製品の売買を禁止する法案に反対する「反PSEデモ」や、駅前を公的に占拠するために立候補し爆音ライブやパフォーマンスを展開した「選挙作戦」によって注目が集まったことがあげられる。生活はアルバイトでまかなっており、2005年頃はリサイクルショップで働いた後に、倉庫とトラックだけの無店舗営業のリサイクルショップを自営するようになった。

次にYという人物がいる。彼は18歳のときに高円寺駅前のケンタッキーやマクドナルドの前に毎週土曜日に、店は何も売らないし客は何も売らない、ただただ酒を飲むたまり場としての路上店<場所pp>を展開していた。¹⁴ その後パフォーマンス集団「トリオフォー」を結成、その一員だったのが3人目のOである。

¹² 松本、二木 (2008)

¹³ 松本哉 (2008) より

¹⁴ 同上

Oは、「トリオフォー」としてインターネットラジオを始めた。そのラジオの番組名が「素人の乱」である。

上記の経緯があった後の2005年5月頃、M及びYはきちんと店舗を構えたいという点で交流が密になり、Y及びOがインターネットラジオとトリオフォーで連絡していた。このように3人がつながり、高円寺北口中通り商店街で空き店舗を借りてオープンしたのが「素人の乱<1号館>」である。1号館のオープンまでの経緯については第IV部でより詳しく述べる。



◀ 素人の乱5号館閉店時の看板

現在はMの経営するリサイクルショップ素人の乱<5号館、14号館>、Yの経営する古着屋<2号館>、古着屋<7号館>、昼はベジタリアン食堂で夜は呑み屋のセピア<9号館>、リサイクルショップ<11号館>、多目的イベントホール<12号館>、古着屋<13号館>が実質経営を行っている。11号館を除き、全て高円寺北口中通り商店街で展開している。それぞれの店は徒歩1～5分圏内と密集しており、経営者の年齢層（30代の男性、ベジタリアン食堂のみ女性）や学歴（高卒もしくは中堅大学）もほぼ一致している。また9号館などは店舗経営だけでは生活費全てを稼ぐことは出来ず、他のアルバイトと兼業しているケースもある。それぞれの店長は、デモイベントで知り合ったり、何度か一緒に呑む中で「自分もお店を持ってみたい」「じゃあもし空き店舗さえ見つければやってみたら」という気軽なやり方で展開している。

▼ 素人の乱の人々一覧

名前	運営店舗	<素人の乱への参加時期>	備考
M	リサイクルショップ	立ち上げ人	素人の乱の中心人物。デモ活動の企画・実行も行っている。

Y	古着屋	立ち上げ人	素人の乱の中心人物。政治活動には興味がなくアートイベント中心に活動している。
O	—	立ち上げ人	ネットラジオなどの行っている、店舗運営はしてない。祖父が引退前は商店街メンバーだった。
T	リサイクルショップ	Yの友人。1号店オープン時期より。	デモ活動では、車の運転などを行っている。Tの店のみ阿佐ヶ谷店に出店中。
N	呑み屋	Tより前だが、詳しくは未明。	昼は別の仕事をしながら運営している（最近、素人の乱だけに仕事をまとめた様子）

2-2. 「素人の乱」の人々の日常

マスコミを通して「素人の乱」を眺めるとき、その実体の核にはデモ活動がある、という印象が強い。しかし何度も高円寺を訪れて分かるのは、各運営店舗内で馴染みの客と談笑、場合によっては飲酒をしながら話している様子や、インターネットで時間を潰しながらの店番をしている、あるいはボーっと喫煙するといった姿を、かなり高い頻度で見かけるということだ。

素人の乱の人々の中心には、高円寺北中通り商店街での各店舗の運営があると言えるのではないか。ではそれはいかなるものだろう。

2-1-1. 時間感覚

ほとんどの店舗が、正午～15時から深夜1時までという夜型の経営になっている。開店閉店の時間は厳密ではなく、お客の入りによって変動する。「いまだに古着屋を商売と割り切れてないんだよ。友達が5人くらい来ると軽く店閉めて遊びに行っちゃう¹⁵⁾」というようなケースもある。実際に筆者がYのもとを訪れた際にも、16時近くに店をオープンしかけ「どうせなら、どっかお茶でも行きますか」ということになり、実際には店は開いていない。またYは日曜日を定休にしており、その際はアルバイトに全権をまかせるか、あるいは店自体を閉めてしまう。11号館の店長であるTも、土日をアルバイトにまかせきるなど、運営はマイペースであると言える。また、各店舗閉店後は冷蔵庫とその中にビールを常備している5号館か、あるいは呑み屋である9号館に集まり、ほぼ毎日朝方5時まで呑み明かすことが多い。

¹⁵⁾ 松本・二木 (2008)

2-1-2. 金銭感覚

前章の最後にも書いたが、5号館には冷蔵庫があり、そこには常に大量のビールが冷やされている。5号館に遊びにいった際はレジにあるソファに座って、それを呑むことができる。ビールは150円前後で販売しており誰でも購入して呑むことが出来るが、実際に呑むのはアルバイトや他店店長、顔なじみのメンバーである。そのため代金を支払わずに呑むのが大抵である。そのことについてMは「引っ越しの手伝いでもらったものだし、一ケースあるから自由に呑んでもらってかまわない」と言う。逆に9号館で呑んでいる時に「おごる」という行為はあまり見られなかった。この事から「タダで手にいれたものをタダで配る」という感覚がなんとなく共有されているとともに、具体的な金銭共有を避けあくまでも個人という最小の生活領域は守っているという印象を受けた。その現れか、Yが「お互いに“売り上げどう？”といった話はしない」と言うように、経営を意識的に支え合っている様子はなく独立独歩という印象を受けた。

また話が前後するが、「タダで手にいれたものをタダで配る」感覚は、商品であるソファに座りつつ希望があればそれをそのまま販売したり、デモで商品であるスピーカーを流用する感覚にもつながっているとと言える。

また別の側面として、酒を呑む時は9号館、服を買うなら古着屋の店舗、家具を買うならリサイクルショップでというように、生活用品を相互の店舗でまかない合うという、という点がある。これによって常に相互に金銭の循環が行われ、逆に流出することも免れている。また素人の乱店舗以外でも例えば食事は高円寺内の飲食店で済ませており、さらに出前に来た人がそのまま買い取りや家具修理の依頼をしていくなど、経済圏が非常に限定されている。素人の乱に集まる人々はこのような経済状態を「高円寺の中で全て済んでしまう」「渋谷とかあんまりいかない」と笑いながら表している。「儲りはしないけど、なんとかそこそこで生きていける」状態である、とも言っていた。

2-1-3. 恋愛感覚

現在、5号館で働く10名のアルバイトの中に、結婚したカップルが一組含まれている。二人とも5号館の給料で、結婚後の生活も成り立っているという。今のところこのカップルに子どもはなく、また素人の乱の店主たちで子どもを抱えるという状況になった人はいない。結婚及び養育になると、現在のように個人でなんとか生きて行くという経済状況では厳しいのではないかと、という質問をぶつけたところ「まあなんとかなるでしょ」という回答であった。

結婚については、子どもが出来ないとしない、という。単純に今現在相手がいらないメンバーと、いたとしても恋人もたいていは仲間内であることが多い。そのため結婚しても何も変化が

なく、あえて結婚する必要も感じない、という意識である。

2-1-4. 場所感覚

素人の乱に関して、最も大切な要素が場所の共有であると言える。2-1-1～2-1-3で展開した共有感覚も全ては場所の共有に保証されてのものだ。無秩序に展開しているようにも見える素人の乱も、「高円寺」という場所に大きく拠っていると見える。著者がいくつか素人の乱店舗を観察する限り、やはり同じような雰囲気を持った人たちが集まっている印象を受けたためだ。

M「高円寺は古くても安いものが売れる。阿佐ヶ谷は良くて安ければいいけど、ちょっと高くても売れる。住み分けがあるし、高円寺の方がかまってもらいたがりの変な客が多いよ」

M「音楽好きな人とか。みんなやりたいようにやっている。そこが面白いよね」

高円寺という土地がもともと持っていた「雑然としている／自己表現活動に比重を置いている／夜型人間である」といった特徴を持っている人を引きつけるため、似たようなタイプの人間が集まる。

しかしそれ以上に高円寺に実際に住んでいる、ということが重要であるという印象を受ける。2号館のYは高円寺界隈の出身、5号館Mも店から徒歩5～6分のところに住み、9号館の店長Nは徒歩2分ほどのところに住んでいる。特にNは生活費をまかなっている昼の仕事場があるにも関わらず高円寺を選択している。生活範囲が狭く、「最近、結局同じ人しかこの道も通らないから知り合いが増え過ぎちゃって¹⁶」というほどである。事実筆者が5号館にてMにインタビュー中に店頭をNが通り、Yが入店してきた。Kちゃんというアルバイトの女性と5号館で会ったあとに、インタビュー後移った2号館で再び遭遇したこともある。

「同じところに住んでいる」ということが日常においては強く意識されるために、個人の能力やイベント参加が実は強要されないところも特徴である。

O「(元素人の乱店主の)Hさんみたいに『(デモ)運動』にまったく興味のない、フラットな人がいるっていうのは、すごくいいよね」

M「あんま素人の乱に関係なくやってるようで、なんか気にはしてる」

¹⁶ 松本・二木 (2008)

N「呑み屋やってるって言っても、酒は詳しくない。俺はビールとイモさえあればよくて。カクテルは置いといてくれって頼まれるから置いてあるんで、テキトーに作る」
「音楽は好きだけど、スピーカーにこだわるほどじゃない」

「みんな近所に住んでいるから、携帯電話もほとんど使う必要がない。仲間がたくさんいて、毎日が楽しいから、特に何かを買いたいとおもわない」¹⁷と M が言っているように、日常生活の場所を共有している、ということは重要なことであると言える。逆に言えば、高円寺という土地から離れていく場合もある。

F「Yさんがあづま通りから戻ってきて<2号館>をオープンするよね。で、Uくんの<7号館>は素人の乱からは離れる」

M「そうだね。Uくんの店は素人の乱グループっていう感じではなくなった。ただの友達の店という感じになってきた」¹⁸

たとえ以前と同じように素人の乱の看板で古着屋を展開していてもグループのメンバーではないという雰囲気になる。時間も金銭も活動も流動的にならざるを得ない集団が結びつくため、<居場所>というキーワード、日常における生活の重要性は比例して増している。

2-3. 素人の乱の個人活動の影響

素人の乱は、一つの共有の目的を持った集団のように見えるが実体はそうではない。メンバーが固定されている訳でも、定期的な活動がある訳でもない。最近では M がメディアで多く取り上げられる事から中心リーダーのように見えるが、むしろそのように突出することを M 自身が避けようとしている。

Y「誰も威張ってない状態で、みんな誰の場所かっていうのをあんまりわかってないっていうのもあった」

M「全員が気使ってるもんね。あれもすごい空間だった」¹⁹

素人の乱はこのような意味で、集団というよりイベント名の冠であると言う方が正しく、そ

¹⁷ 朝日新聞「ロストジェネレーション」取材班（2007）

¹⁸ 松本・二木（2008）

¹⁹ 同上

こに人が出入りしているのが実質であると言える。その意味で生活共同体ではないため、2-1-2で述べたような個人領域を守る金銭感覚が成立する。

また個人の活動が優先される、という特徴に伴って誰がどのような内容のイベントを主宰するかによって集まる客層が異なるという状況が発生している。デモといった政治的なイベントにはMが中心となりデモ映像を撮影編集するスタッフや音楽でアジる人、海外のアナキストとの交流が密な人が顔を並べ、集まる人々は自身政治的な活動をしている30代~40代後半くらいまでの男性が多い。一方、Yが主宰するイベントはアートが中心であり、客層は20代~30代のDJや読書会といったアート活動をしている人が多く集まる。それぞれは完全に住み分けられている。

Y「(素人の乱の店舗運営が始まって1週間くらいの頃)素人の乱にゴリゴリに運動している人たちがばかり店に来てたけど、俺はそういうのがまったくわかんなくて」

T「Yくんが酔っぱらって『政治とかよくわかんないんだけど』って絶対言ってた時期だもんね」²⁰

(筆者が素人の乱について聞きたいと言ったことを受けて)

Y「ほんっと、政治的なこととか分かんないから、内心ビクビクしてんす」

N「最近、素人の乱に来る人は政治ボーイ・デモボーイだからね。俺そういうの興味ないし、『そういう話したいなら<5号館>へどうぞ』って言ってる」

また、素人の乱名義で店舗を構える店長同士も、必ずお互いのイベントに参加しているという訳ではなく、場合によってお互いが現在何をしているのかを把握してないない場合もある。

N「デモは参加できる時だけ参加する。昼の仕事との兼ね合いもあるし」

このようにお互いが一定の距離感を維持しながらあくまで個人として素人の乱に関わっている様子がうかがえる。

その意味でデモの最大の目的は人を集めることで、普段は個別に活動している人たちが「素人の乱なのだ」という一体感を味わうと同時に、新しい人を取り入れて集団として強化することがある。これは3ヶ月~6ヶ月に一回の割合でデモが行われており、「話す内容が欲しかったんだよ。その場をどうにか逃れたかったんだよ。2人(MとY)で飲みに行こうってことになって、全然話すことがなくて、大概そういうときに次のデモが決まるんだよ(笑)」²¹という発

²⁰ 松本・二木(2008)

²¹ 松本・二木(2008)

言にも見ることが出来る。

その人が個人でどれだけの人を集められるか、というのは一つの重要な要素となってくる。人脈を常に開拓していき結果、それぞれのイベントで生まれた人間関係が高円寺の素人の乱の店舗において結びつく。人脈の拡大は、来るものを拒まず、しかもすぐに仲間内に取り込もうとするスタイルにも現れている。著者が2回ほどのインタビューの後に、M、Tなどからアルバイトをしないかという誘いを受けたことにも見ることが出来。また「NOPPIN 新聞」や「週刊素人の乱」などのビラ配り、店に来た人はとりあえず笑顔で受け入れ酒を振る舞うという面もある。雑多な人種が素人の乱に出入りするようになる状況そのものが価値のあることとされているのだ。

T「全く知らない人と知り合いになれる場所だった」

M「場所があつて人がいて、中心的な人がいなくても自然とここに人が集まるわけだから。そういう混沌とした感じになってきたからこっちのほうが面白い」²²

このような積極性が、高円寺北中通り商店街という土地に人を、特に同世代の人々を引き込むことに発揮されている。

第Ⅲ部：高円寺北中通り商店街

本章では、「素人の乱」が展開する「北中通り商店街」について記述する。高円寺駅北口に位置する北通り商店街であるが、高円寺駅北口には大きく4つの商店街が展開している。それぞれ「純情通り商店街」「あづま通り商店街」「庚申通り商店街」「中通り商店街」と言い、北通り商店街は中通商店街の延長線上に位置する。そのため合わせて「北中通り商店街」と呼ばれることが多く、本論文でもこの名称を使用する。

以下では、なぜ素人の乱が北通りに集中しているのかを理解するために、他の商店街との比較や、商店街の様子の変遷をたどる。

3-1. 各商店街の様子

高円寺駅に存在する4つの商店街はそれぞれどのような位置関係で、どのような特徴があるのだろうか。本章では、北中通り商店街とは、立地位置はほとんど変わらないにも関わらず雰囲気全くことなる「純情通り商店街」を比較対象注目しながら、それぞれの商店街の様子について説明する。

²² 同上

3-1-1. 純情通り商店街

まず真っ先に目に付くのが、最も駅からの距離が近く道幅も大きい「純情通り商店街」である。純情通り商店街は、加盟店 219、かつては高円寺駅銀座通りと呼ばれていたが、高円寺出身の作家ねじめ正一の『高円寺駅純情商店街』が 1989 年に第 101 の直木賞を受賞したことをきっかけに、現在の名称に改名している。²³

商店街入り口には、夕食時には 30 人程度の人がひしめく青果鮮魚の店があり、さらにチェーン薬局であるサンドラッグと、もう一つ大きな薬局があり、ここで日常生活に必要な品はある程度まかなうことが出来る。

駅から見た純情通り商店街 ▶



◀ 純情通り商店街

大手コンビニや、チェーン薬局、遠目にはパチンコ店のネオンが目につく。

商店街は端から端まで 15 分程度の長さだが、コンビニが 3 店、携帯電話販売店が 2 店、チェーンのドラッグストアやカラオケボックス、パチンコ店などがある。一方で高円寺と聞

²³ 高円寺純情商店街など商店が頑張る街 (<http://d-skoenji.jp/town/koenji/jvunjyo.php>)

いてイメージに浮かぶような古着屋は1店しか見ることが出来なかった。また派生する脇道には呑み屋が多く、呑み屋以外にも小規模経営の店が点在している。庚申通り商店街にも脇道をたどって行くことが出来る。

3-1-2. 北中通り商店街

純情通り商店街を、駅を背にして左手にすすむと「中通り商店街」に合流する。マクドナルドと上島珈琲店の間に、小さく看板を掲げており、商店街というより脇道の一つ、という印象を受ける。



駅から見た中通り商店街 ▶

通りに入ると、長く経営していると思われる古本屋が2軒と喫茶店が1店あることを覗いては、両サイド合わせて7～8軒ほどの風俗店、所謂ピンク産業と呼ばれる店舗が並んでいる。風俗店舗群を抜けると、昔から経営しているとおぼしきパン屋やケーキ屋、薬局などが続く。コンビニは1店のみで、青果鮮魚や調味料、洗剤といった一通りの生活用品を揃えたスーパーが1店、24時間営業をしている。古着屋や中古レコードショップや、カフェ・居酒屋・定食屋といった飲食に関する店が多く、それぞれ計9店、計12店である。その他に接骨院と小児科・内科があり、美容室やクリーニング店や酒屋といった店が、個人経営らしく小規模で展開している。



中通り商店街と北通り商店街はほど住所で分かれており、店舗で言うと「Aorta。」という洋服屋、「串焼 DIZZ」「馬橋針灸院」などが境界にあたる。

QuickTimey C²
TIFFAriOaekAj êLiEVeçÉOÉaÉÁ
Ç™Ç±ÇÁÉsÉNE ÉÉÇ%a@ÇÉÇzÇ%Ç...ÇÓiKónÇ-ÇÁB

▲ 北中通り商店街のマップ²⁴

両通りを合わせて、端から端まで20分程度で歩くことが出来る。脇道にそれると、個人住宅が入り組んで並んでおり、また北通り商店街を抜けると左右には大きなマンションがあった。

3-1-3. その他の商店街

「あづま通り商店街」は、古着屋やカフェといった若者をターゲットとした店が多く賑わってはいるが、純情通りや北中通り商店街からは駅を背に左右で反対に位置しているために距離がある。

純情通り商店街と北中通り商店街の間に位置するような「庚申通り商店街」は、串焼きやパンなどを食べ歩きも出来るような、一口70～90円といった値段で小売りしている、個人経営の小規模な店が多く並んでいる。

3-1-4. まとめ

以上が4つの商店街についてである。それぞれの商店街は独立独歩の状態であり、ほとんど交流はないという。これが駅を挟んで北口と南口では全く様子も違い、交流は行われ

²⁴ 北中通り商店街 HP より (<http://koenji-kitanaka.com/>)

ていない。今回「素人の乱」が展開しているということで、細かい調査の対象となった中通りと北中通りは商栄会の運営を通して比較的交流は密であるという。とは言え商店街会長以外の人へのインタビューが「他の店のことは分らん」と断られてしまったことや、中通り商店街長である A さんが「商店街同士の交流はあるが、個人的に若い店舗との交流はない」と言っているように、商店街同士以上に世代差の交流がほとんどないことも指摘できる。また A さん曰く「中央線の高価格化してしまった。あと人口は変わらないけど、商店街や道路が分散してしまったために、一つ一つの商店街の人通りが減った」というように、4つの商店街があるゆえの問題も発生している。さらに古着屋や呑み屋が多いためか、A さんによると「ここ1～2年くらい土日の若い人の出入りが多くなった」とあり、事実20代～40代の独身男性の一人暮らし人口が杉並区であった。

蛇足ながら付け加えるに、2009年5月に杉並区芸術劇場「座・高円寺」のオープンが予定されており、座・高円寺の設立²⁵やそれに伴う5月のイベントによって、現在4つの商店街の連動が活発化しつつある。今後の連携に期待を持って、商店街会長を中心に積極的に活動している様子も見受けられた。

3-2. 北中通り商店街の歴史

北中通り商店街は、どのような変遷を経て今日に至ったのであろうか。また北中通り商店街の人たちには、どのような問題意識が共有されているのだろうか。本章ではこれらの問いに対して、北中通り商店街の人々へのインタビューを通して回答する。インタビューに協力して下さったのは、40～50年の間北中通りで自営業を営んでおり、かつ現在、中通商店街会長、北通商店街会長を務めている A さん B さんと、高円寺で素人の乱を含めた若い商店主と古くからの商店主の間にたって交流を図っている S さんである。

3-2-1. 商店街の高齢化

1922年（大正11年）7月	高円寺駅 開業
1923年	関東大震災
1929年（昭和4年）4月	通信学校通り睦会の結成……しんぼくの会 ・通りにまばらな商店と民家が点在

²⁵ 座・高円寺公式 HP(<http://za-koenji.jp/>)

	・ 悪路の改修工事と街路灯の新設
1948年（昭和23年）	馬橋中通り商栄会と改称
1965年（昭和40年）	高円寺北中通り商栄会と改称（町名変更）
	・ 高度成長期
	・ 8の日会売り出し：商店街で使用できるサービス券の発行、商品の交換会を行う
	・ お花見セール現金つかみ取り
	・ 歳末セール
	・ 夏の縁日
1997年（平成9年）	
	・ カラー舗装
	・ 街路灯の新設
1999年（平成11年）9月	<u>夏の縁日の中止</u>
2002年（平成14年）	<u>最後の歳末セール・サービス券²⁶</u>

年表から判断するに、現在2009年地点から約40～50年前の高度成長期の頃より、商店街の店舗数が増え、普段の商売とは別に、特別なイベントに自分たちで取り組む、ということが始まっている。

Aさん「昭和30年代～40年代が全盛期だった」

「名物の阿波踊りによる町おこしの歴史は50年」

という発言にも見られるように、1950～60年代が、北通り商店街が最も活発な時期であったと言える。

しかし、Bさんの「とうふ屋だけでなんとか成り立っていたのは、20年くらい前まで。20年前って言っても下降気味だったけど」という発言に見られるように、だんだんと商店街をとりまく状況が厳しくなっていく。その一番の原因が、「跡継ぎがない」ということである。

Aさん「初代はもう亡くなっていて、私たちが2代目に当たるんだけど、もうだいたいが還暦で引退しているか、引退間近でしょう。3代目はいないんだよ。向かいの酒屋と、あと2軒くらいでしょ、跡継ぎがいるの」

Sさん「2代目、3代目は高円寺以外のところに勤め人となって出て行ってしまっている」

²⁶ Sさん作成、高円寺北中通り商栄会の歴史より

Bさん「もう私も引退、3月でこの店もおしまい。先にある魚屋さんもそろそろ店を閉めるって言っていた」

Aさんは60代Bさんは70代であるが、いずれも口を揃えるのが自らの引退とそれによって発生する跡継ぎ不足の問題である。

高度成長期には52～4軒あった店が、現在では40店舗になり、そのうち跡継ぎによって店の運営が続いているのは3つ、3代目まで受け継がれているのは1店舗のみであった。

跡継ぎの不足によって引き起ったのが、商店街の高齢化である。現在北中通りには40店あるが、その年齢内訳は、

20～40代	/	19店
50～60代	/	12店
70代	/	9店

となっている。50代～70代、Aさんの実感では「商店街の中心が60代になっている」という状況になったのだ、

高齢化によって、商店街に体力がなくなった。それが先ほどの年表の1999年の夏の縁日の中止に現れている。直射日光の下で長時間働くとフラフラになってしまうために、縁日ができなくなってしまったのだ。提灯を飾り付けたり、会場設営をする体力を持った20～40代の人手不足のために、他のイベントもだんだんと衰退していくこととなる。

3-2-2. 商店街の店舗数の減少

前章で述べたように跡継ぎ不足と高齢化による引退者の続出によって、商店街の店舗数が徐々に減少して来たこともまた無視出来ない問題である。

特にAさんもBさんもSさんも口を揃えて言うのが「物販の店が減った」「わけても日常生活品を扱う店が減った、昔は肉屋から乾物屋、和菓子屋まであったのに」という。

そして生活用品を扱う個人経営の物販店が減ったことで、2つの大きな変化が起っている。1つ目が、年表では2002年が最後の歳末サービス券イベントの年となっているが、これはサービス券の発行や使用可能店舗の参加が減ったためにイベントが行えなくなった例である。イベントが減ることで、商店街自体が衰退化するだけではなく、定期的にイベントに付随していた参加商店や地域への利益還元もなくなってしまったことも、更なる衰退化を引き起こす原因となったと言える。

また前章の高齢化とも連動するが、個人経営の店舗が減ったことで、生活と商売の場所が分裂してしまったことが、実は切実な問題として意識されている。1960年代前後（高度成

²⁷ Sさん作成、高円寺北中通り商栄会の歴史より

長期)は、商売と生活が一致、商い人であると同時に住民であり、ともに街での子育てやイベントを行っていた。それが出来なくなったのだ。

また「下屋(一階手前に商売スペースがあり、続いて2階や奥まったところに生活スペースのある住宅)の人が減った。昔は下屋の人が多かったから、21時22時には閉まっていた。今は夜遅くまで騒いで、朝帰ってっていう人が多くて。うるさい」というように、生活と商売の場所が一体となっている人とそうでない人の間のズレも引き起こし、それが商店主同士の連帯感を削いでしまう、という事態も起きている。

3-2-3. 商店街の現状と問題点

以上のような現状のために、北中通り商栄会の人々が直面した問題をもう一度述べると、「跡継ぎ不足」「高齢化」「生活と商売の場の不一致」である。さらに、これら3つの要素が引き起こす事態として、「ピンク産業の活性化」「大型チェーン店の進出」が問題となっている。

まずピンク産業だが、3-1-2.に書いたように、北中通り商店街の入り口には風俗店が軒を連ねている。特に2000年以來顕著であるというが、そのために北中通り全体が裏道の印象を持たれてしまい、人通りが減ってしまった。その背景には、ピンク産業の人々が、一番気前良く家賃を出してくれるということがあり(北中通り商店街の衰退と表裏となっているかについては今回の調査では及ばなかった)、その事に対して、不動産屋やかつては商店街仲間だったのにとという大家への怒りが発生している。

また大型チェーン店の進行だが、これによって物販の店がつぶれてしまうこと、また物販の店がなくなることで、駅前のスーパーまで行かないと行けないことが高齢者にとって負担となっている。大根一本抱えるのも一苦勞であり、「陸の孤島」と皮肉られている。²⁸

・またBさんがうるさい、と言っているように生活リズムを無視した24時間オープンの経営体制などにも苦情が出ている。Sさんによると「大手チェーンショップは、地元の顧客への利益還元・共存姿勢が欠如しており、商店街活動への消極性、イベントもともに盛り上げようとの姿勢がない。例えば阿佐ヶ谷の七夕祭りなんかがそうだ」という。大型チェーン店に対するこのような考えは、Aさんも「個人の大きい屋敷が減ってアパートやビルに」なってしまったことを嘆いているように、商店街の人々の共通した意識であると言える。とは言え大手チェーン店の進行が最も顕著なのは、純情通りであり、Aさん曰く「北中通りは地主が分散しているので、極端に大きいスーパーやビルが建ちにくいのも事実。だから、まだ古き良き高円寺の雰囲気少し残っている」ということが誇りとなっている

²⁸ Sさん作成、高円寺北中通り商栄会の歴史より

印象も受けた。

第IV部：「素人の乱」と商店街

4-1. 「素人の乱」が商店街に出店するまでの経緯

前章では、商店街を取り巻く状況を追って来た。本章では、北中通り商店街の人々と「素人の乱」がどのように結びついて来たかを述べる。3-2-1. で示した年表の続きが以下の通りである。

2003年（平成15年）2月	もちつき
11月	杉並野菜無料配布
4月	若い店主へのアンケート
2004年（平成16年）	昼の市：月1回開催。飲食店を中心に、杉並野菜といった特製製品の販売を行う。
2005年（平成17年）1月	<u>新年会←若い人を無料招待</u>
	・商店街のテーマソング→CDの発売
	・ふれあい通りフリーマーケット祭り：第1回目が4月29日。従来のイベントにライブ・フリーマーケットが加わる
2006年（平成18年）	ホームページの作成
2007年（平成19年）1月	1日発行の朝日新聞1面に“ロストジェネレーション”として「素人の乱」が掲載
	（新聞から派生して）→三浦有機野菜の販売開始
	→長野県須坂商業高校・くますぎによる夏の縁日復活
2008年（平成19年）8月	中通李商栄会と同日程でイベント ²⁹

本章を書き進めるに当たって、商店街の人々と「素人の乱」を結びつける中心に、前章から登場しているSさんという方の存在が大きく関わってくる。そのため、まず最初にSさんがいかなる人物であるかについて説明を行う。

²⁹ Sさん作成、高円寺北中通り商栄会の歴史より

4-2. Sさんについて

Sさんは1999年の9月より、北中通り商店街で電気サービス店の経営を始めている。元々が高円寺の出身ではないが、選挙を中心に40代まで政治活動を活発に行っており、自身社会党から立候補している。結果は残念に終わったものの、その時社会党の先輩議員だった人の地盤が高円寺であり、そのためにSさんは1995年から、自治会役員の記録を手伝うなどして高円寺に関わりを持つようになった。1999年当時40歳である。

後に「素人の乱」への協力の姿勢に繋がる背景として、Sさん自身がかつて選挙活動を中心に生活していたため、選挙の度に仕事を辞めるなど不安定な日々を送っており、ガードマンなどいろいろな職種を通ったが、40歳を前後にぱたりと職がなくなった、ということがある。その時に、社会とつながれていない孤独な自分、疎外感を体験したという。その状態からの脱却のチャンスくれたのが当時の高円寺商店街の人たちであり、高円寺には「江戸っ子気質で困った人を助けてあげる文化」があることを強く意識しているという。事実Sさん自身も、現在の電気サービス店を始めるにあたって、月3万で店舗を貸してもらっていた（後の安定化に伴って、合意の上で徐々に値上げ）。だからこそ、「素人の乱」を始めとする、若い店主になるべくチャンスを与えたい、という思いをSさんが持っており、そのSさんが商栄会に深く関わるようになることで事態に変化が起っている。

4-3. 2003年以降から「素人の乱」が北中通り商店街に至るまで

1999年の夏の縁日の中止から4年後の2003年、「商店街事業を活用した体力を使わないイベント」への転換が計られる。それが杉並野菜無料配布であった。美味しいと評判であった杉並野菜をSさん自身が自主的に市場に買い付けに行く事で始まりかつ成立していた。このことから読み取れるように、Sさんが1999年に高円寺に店舗を構えて定住し、商店街活動に本腰を入れるようになったことで、Sさんを中心に「なんとかしなくては」という雰囲気が強くなったことが予測される。事実、4月には当時既に何軒かあった若い店主へのアンケートや、商栄会を今後も主体的な組織として運営していくのか、お茶を楽しんだりするためだけの親睦会にするのかといった話し合いの場も設けられている。

さて2003年当時、商店街の中心であった60代の人々は、アンケートの対象となった若い店主たちをどのように眺めていたのだろうか。インタビューでの発言をいくつか引用する。

Sさん「断絶状態と言えるほどに交流がなかった。上の世代は“お手並み拝見”“コロコロ人が変わるし、本当に商店街の活性化を担ってくれるのか？”という思いがあった」

「活性化のためにも、若い人たちを商栄会の役員メンバーに巻き込みたかったが、“いつまで北中通りで商売をやって行けるのか心配だから役員にはなれない”と断られた」

Aさん「個人的に若い店舗との交流はないね」

Bさん「隣がバーなのだが、夜遅くまで騒がしい。ここ10年くらい前から雰囲気変わった」

「若い人とはほとんど交流はない。イベントしようって言っても、経営時間や客層が違うから、噛み合わない」

「若い人は話聞いたり、興味持ってくれたりしないからねえ。あと若い人はスーパーとか行っちゃうでしょ。店頭での交流が全くない。味の違いも、年寄りしか分かってくれないから、最近じゃ年寄りしか来てくれないねえ」

このように、交流がないか、マイナスのイメージが中心となった。また実施したアンケートが、「役員になれない」「商栄会の今後については際立った意見がない」と空振りに終わるなど、世代間の交流が上手くはかれていなかった。しかしながら、“年配の人が引退し、若い人が中心になっていかざるを得ない”ことは常に意識されており、“若い人を集められるのは若い人だけ、いかに若い人やその意見を取り込んで行くか”という事が重要なテーマとなっていた。

変化が現れたのは2005年1月の新年会である。新年会自体は、商栄会が活発であった高度成長期の時期から行われていたが、店舗数の減少に伴って徐々に参加者が減少していた結果、いつも同じメンバーしか参加せず形骸化している、という状態であった。たこれも店舗数の減少に伴った衰退化しており、2004まではいつも同じメンバー少数が参加するという状態であった。そこでSさんが提案し、無料であればとりあえず何人かは若い人が来てくれるだろうと招待した。「大学のコンパみたいなものが商店街になかった」とSさんが言うように、年に1度でも良いから新しく北中通り商店街にやって来た人たちを歓迎する会があれば、という思惑もあった。

2005年の新年会によって、初めて若い人とSさん、60代の人たちがお酒を飲みながらフランクに会話することができ、「若い人にも、いろんな意見がある」ことが分かるようになった。そこでSさんが窓口となって、商店街活性化のためにいろいろなアイデアを出す、しかもそのアイデアは全ては実現可能かの手続きまで行うことが決められた。

実行手続きの段階で不可能だったために実現しなかったが取り組みの一例として、「北中通りをハリウッド通りにしよう」というものがあった。高円寺出身の有名人の手形を路上に押し並べようというものだが、杉並区役所に確認したところ路上のタイル加工が認めら

れず実現はしなかった。

しかしながら、実現可能性を意識しながら出した企画の一つが実行されることになった。「みうらじゅんと安齋肇による勝手に観光協会」である。みうらじゅんと安齋肇に高円寺の観光大使になってもらい、テーマソングを作ってもらっている。これは、みうらじゅんのやっていた深夜ラジオに、商店街に出入りしていた若い人が依頼文をファックス送信し、まくり実現した。このファックスを送りまくった若い人が O であり、O の友人が素人の乱の中心人物である Y であり、その更に友人が M であった。

4-4. 「素人の乱」1号館の誕生から現在まで

勝手に観光協会のプロジェクトとは別に進行していた、杉並野菜の販売も軌道に乗り、イベントに人々が足を運ぶようにはなっていた。しかしながら、野菜を買ってはすぐに商店街を去ってしまうといったように、なかなか人がたまらなかった。

人足を止める、という目的のために、野菜の販売というイベントにライブ・フリーマーケットの要素を加えた。これには高円寺に出入りする若いミュージシャンの応援という目的もあった。“ふれあい通りフリーマーケット祭り”と題されたこのイベントは、1月の新年会から企画して、たった3ヶ月後の4月に決行され、また運営の中心に若い人が加わったのが大きな変化であった。

“ふれあい通りフリーマーケット祭り”の運営を通して、Sさんを始めとする当時の60代の商店街の中心人物たちが知ったのが、「若い人がお店を持ちたがっている」ということだった。それまでは、不安定収入である店舗系の自営業を長くやっっていこうと思っている若者はいないと思っていたのだ。では若い人にお店を持たせてみようということになり、勝手に観光協会の企画で知り合い、なおかつ流動的な高円寺にあって成立しそうなリサイクルショップの経営を考えていた、Mに店舗の貸し出しが行われた。

当時のYさんという商店街会長の持ち物であった9月までに立て壊す空き店舗を、期間限定でとは言え月5～6万という値段で貸し出したのである。これが「素人の乱1号館」だ。

店舗を貸し出したあとも、Sさんが亡くなった人の荷物整理をMに紹介しリサイクルショップの商品を元金がなくとも増やせるように計らうなど、経営が軌道に乗るまでさまざまなサポートを行っている。

9月に1号館の店舗が取り壊されることになった際も、このままでは若い人のチャンスがとぶれるだけでなく、「やっぱり若い人は根付かない」という印象を従来の店主たちが抱かないようにするために継続の道を探った。高齢化によって空き店舗になる店が必ず出てくるから、そこを格安で貸してあげられないかと不動産屋を通さず直接に持ち主に交渉したが、ここでも前商店街会長のYさんや、素人の乱のメンバーであり祖父が生前に商店街

のメンバーだった O が、間にたっている。結果見つかった 2 号館も月 1 万（本来だったら家賃月 5～6 万は下らない）で借りることが出来ている。このような手順の繰り返しで、現在のような、素人の乱 1 3 店舗の展開が発生したのである。

4-5. 「素人の乱」が担った活性化

このように北中通り商店街でさまざまな協力を受けた「素人の乱」だが、逆に素人の乱のメンバーが北中通り商店街に対して行ったことや、それに伴って与えた印象とはどのようなものだろうか。

最初にあげられるのは、若い世代の呼び込みである。S さんへのインタビューでとても面白く思ったのが、「素人の乱」の M が商店街に参入するにあたってやってもらったこととして「神輿担ぎ」をあげていたことだ。祭りの際に神輿担ぎも、担ぎ手が 6～7 名でしかも高齢化していたために衰退化していた。これに M の呼びかけで 20 人前後の若者が集まった。神輿を担ぐことで地域の一人として認められる、普段交流のない人たちが、M ら若い人の存在を認知し、それが日常での仕事の依頼につながる場としての神輿担ぎが強く意識されていた。

商栄会の運営に関しては、今現在はまだ 60 代の人々が中心であるが、商店街費などの集金は若い人に頼むように変えてきていると言う。

このような現状は B さんが「素人の乱の人たちは、イベントで提灯付けとか頼むと喜んで引き受けてくれるからありがたい。頼みやすい。若い人手が必要な時とか、つい頼んじゃう」と言っているように好評である。

では、商店街ではなくデモ活動体としての素人の乱はどのような印象を持たれているのだろうか。先ほども前々章で書いたように B さんには「夜まで騒がしいから、3 月に引退したら引っ越したい」という発言や、A さんの「何をしているか全く分からない」と認識していない人もいる。

S さんは「違和感はない。自身政治活動をしていたし。商売は商売で、それ以外のことはみんないろいろあるし、それをどう思うかは関与しない。理解できない部分もあるし、全員が理解している訳ではない。夜遅くまで騒いでたりとか。そうすると怒る時もあるし」と述べている。

今回のインタビューではないが、2007 年 12 月 24 日に行われた「クリスマス粉砕デモ」でランダムに声をかけた店主は「うるさい、迷惑だ」「まあたまにはいいんじゃない」という感情評価をするものから、「うん、こういうデモよくあるみたいよ」と認知している発言などが見られた。

4-6. まとめ

本章で見てきたように、「素人の乱」が店舗を新設展開していくにあたって、高円寺の北中通り商店街の現状と、Sさんという人物が大きな要素として関わって来ている。

Sさんに対して「素人の乱」の人々は「頭が上がらない」と言っている。上の章に書くことが出来なかったが、1号館の开店に関して月5～6万の家賃の頭金2万と内装改装費2万円で店が始められた、「現在もお店が続けられているのは家賃の安さに加えて初期投資が安かったために借金がない」からだと言っている。現在は徐々に値上げして、高円寺の平均的な賃貸金額を支払っているという。またMの運営するリサイクルショップは軌道に乗っており、現在は10人のアルバイトを雇うことが出来ている。

5. 結論

11月4日にH大学で行われた素人の乱による講演会や著作中において、Mは横のつながりこそが大事であり、そのために居場所を持つ事の重要性を強調している。

M「大反乱集団（というデモ活動）は生活に密着していないからこっちが仕掛けたときだけ何かがあって、こっちが仕掛け続けなければそれが繋がっていかない。あるいは、こっちが何かやることで人が集まってくるから、こっちと集まってくる人たちの繋がりばかりが増えていって、集まる人どうしの繋がりをつくらなきゃいけないのになかなかできなかった」³⁰

M「イベントはその時はわーっと人が集まるけど続かない。店があれば何となく人がたまる、それが大切」

個人で特定の資金を保持しておらず、また雇用も不安定なロス・ジェネレーションにとって、まず拠点となる場所を確保できることは大きい。生活や稼ぐ手段を得られるだけでなく、常に外部、この場合素人の乱以外の人々に対して開かれた場所は、次々と仕事やイベントのきっかけとなるような人々やアイデアが集積する場所になる。単発で終わらない人脈を築くことができる。即ち生活資本が、場所を持つ事で安定化、うまく行けば緩やかに上昇していくことも可能となるのだ。

M「あそこに行けばあのコミュニティに出会えるみたいな、そういうのを俺はつくりたかった」

³⁰ 同上

³¹ 松本・二木 (2008)

一度コミュニティが成立すると、「素人の乱」に顕著であるように一つのイメージを持った固まりとして流通するようになる。これは商店街のイメージとなり、そのイメージに惹かれて足を運ぶ人が現れる。活性化に繋がるのだ。

その一方で、もともと商店街の持っていた強みであるが、個人がつくる繋がり拡大の限界を超えることが出来る。一つでは大きなことが出来なくても、連携し合うことで大きな効果を生み出すという商店街というシステムが、資本を持たないロスト・ジェネレーションのスタイルにもプラスに働くのである。

もちろん“素人の乱”のケースは、複数の要素がプラスに作用した結果である。それらは以下のようにまとめることが出来る。

- (1) 東京の中央線に位置する高円寺という土地柄。人が足を運びやすく、定住性も流動性もある。そして音楽や演劇といったパートタイムの仕事につかざるをえない人にとって魅力的な土地だ。地方の商店街であればデモという話題だけで、商店街の活性化に繋がるような集客パワーがあったかは疑問である。
- (2) 大型店舗、ピンク産業の進出による危機感が商店街に強かったこと。そのために、チェーン店への貸店舗や空き部屋のままにすることなく、若者たちへの格安賃借という状況が生まれた。
- (3) Sさんという重要な仲介役を担える人物がいた。

それぞれを言い換えて、商店街とロスト・ジェネレーションがうまく相乗効果を発揮するためには、商店街に巻き込みたい世代（この場合ロスト・ジェネレーション、若者）の人口が多いこと、明確対立関係があること、キーパーソンが存在がある。これらを意識的にそろえるか、あるいは類する対処を行うことができれば、相乗効果を生むことができる。海外において、ロストした世代が働かずに犯罪を起こす段階まで進んでいることを考えた場合、自営する意識のある若者に場を与えることは有意義であるのではないだろうか。

本論文で見て来たように、ロスト・ジェネレーションでありながら若さと発想力と実行力を持った人たちと、どうにかシャッターを下ろしてしまう店を減らしチェーンやピンク風俗に圧倒されないまちづくりをしたいと奮闘した商店街が結びついたところに、「素人の乱」が生まれた、のである。これまでプレカリアート運動の一つとしてデモか活動の面が強調されてきた素人の乱だが、デモ活動と同等かそれ以上に、高円寺北中通り商店街における日々の店舗経営が重要であると言う事も大げさではないのではないだろうか。

参考文献

<書籍>

松本哉『貧乏人の逆襲—タダで生きる方法』（筑摩書房、2008年6月12）

松本哉・二木信『素人の乱』（河出書房新書、2008年8月30日）

本田由紀『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化の中で』

（NTT出版株式会社、2005年11月30日）

本田由紀編『若者の労働と生活世界—彼らはどんな現実を生きているか』

（大月書房、2007年5月18日）

朝日新聞「ロストジェネレーション」取材班

『ロストジェネレーション—さまよう2000万人』（朝日新聞社、2007年7月30日）

小林美希『ルポ“正社員”の若者たち—就職氷河期世代を追う』（岩波書店、2008年6月26日）

中沢孝夫『変わる商店街』（岩波新書、2001年3月19日）

板倉勇『流通は変わる／シリーズ 大型店 vs.商店街《改訂版》—競争と淘汰の原理』

（中央経済社、1987年10月15日）

小川雅人、毒島龍一、福田敦『現代の商店街活性化戦略』（創風社、2004年1月10日）

石原武政、加藤司 編集『MINERVA 現代経営学業書 28 商業・まちづくりネットワーク』

（ミネルヴァ書房、2005年2月20日）

金子郁容『新版 コミュニティ・ソリューション』（岩波書店、2002年4月22日）

雨宮処凛『生きさせろ！』（太田出版、2007年3月27日）

小熊英二・上野陽子『＜癒し＞のナショナリズム』（慶應義塾大学出版会、2003年5月25日）

W.F.ホワイト著、奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナーソサエティ』

（有斐閣、2000年4月30日）

竹内洋『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』（中央新書、2003年7月25日）

ロバート・B・ライシュ著、清家篤訳『勝者の代償』（東洋経済新報社、2002年8月1日）

ダニエル・ピンク著、池村千秋訳『フリーエージェント社会の到来』

（ダイヤモンド社、2002年4月18日）

<雑誌>

『SPA！ 2008年9月23日号』

『散歩の達人—中野／高円寺／阿佐ヶ谷 2009年2月1日号』

<web ページ>

素人の乱ホームページ（アクセス日：2008年11月16日）

高円寺北中通り商店街ホームページ（アクセス日：2009年1月24日）

みえの中心市街地活性化 NAVI 「ミニチャレンジショップの取り組み」

（アクセス日：2009年1月29日）

赤木智弘『深夜のシマネコ』「丸山眞男をひっぱたきたい 31歳フリーター。希望は戦争」

（アクセス日：2008年11月16日）

